

「岩手の幸福に関する指標」研究会（第1回）

（開催日時）平成28年4月28日（木）15：00～17：10

（開催場所）岩手県立大学アイーナキャンパス7階学習室1

- 1 開 会
- 2 挨 拶（政策地域部長）
- 3 委員紹介
- 4 協議事項等
 - （1）座長の選出
 - （2）研究会の基本的な考え方について
 - （3）スケジュール
 - （4）意見交換
 - （5）その他
- 5 閉 会

出席委員

吉野英岐座長、竹村祥子委員、谷藤邦基委員、山田佳奈委員、若菜千穂委員
アドバイザー
広井良典

1 開 会

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** それでは、お時間となりましたので、ただいまから第1回「岩手の幸福に関する指標」研究会を開催させていただきます。

本日、山田委員でございますけれども、所要により15時半ごろにご到着の予定ということでお伺いしておりますので、始めさせていただきますと思います。

私、事務局を担当しております政策地域部政策推進室評価課長の臼井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

2 挨 拶

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** それでは、開会に当たりまして大平政策地域部長からご挨拶申し上げます。

○**大平政策地域部長** 政策地域部長の大平です。今日はよろしくお願いいたします。

第1回「岩手の幸福に関する指標」研究会の開催に当たり、ご挨拶申し上げます。本研究会の委員及びアドバイザーにご就任いただきましたこと、そしてご多忙の中、本日の研究会にご出席いただきましたことに厚く御礼申し上げます。

岩手県といたしましては、県政の推進に当たりまして、物質的なゆたかさに加え、岩手ならではの生き方やゆたかさに着目することが重要と考え、次期県民計画策定に向けまして、幸福に関する指標の導入を検討することといたしました。検討に当たりましては、ま

ず先行研究はもとより、岩手県の社会経済的背景、地域の状況などについて幅広く専門的な観点からご議論いただくことが必要と考えており、このたび有識者の皆様から成る本研究会を設置したところであります。

本研究会では、次期県民計画の反映に向けまして、まずは 10 月ころに中間報告をいただきたいと考えてございます。県民の幸福に関する施策の領域はどのようなものか、岩手が目指すゆたかさを示す指標としてどのようなものが考えられるかなどといった点につきまして、それぞれのご専門の観点から忌憚のないご意見、ご議論を賜りますようお願い申し上げます。開会に当たりましてご挨拶とさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 それでは、議事に入ります前に、資料のご確認をさせていただきます。

お手元の本日お配りしている資料をごらんいただければと思います。1 枚目に次第がございまして、2 枚目に座席表、その後資料一覧ということで目次をおつけしております。それ以降、資料 1 から資料 8 までございます。資料 1、一番下に 1 ページと書いてあるものから、資料 8 の一番最後のページ、59 ページまで資料でございます。ご審議いただく中で、資料の不足等もしございましたら事務局のほうにお申しつけいただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

また、本日の研究会につきましては公開ということで、傍聴や取材について自由にお越しいただくようにしております。傍聴される方、ご取材いただく方につきましては、円滑な議事の進行にご協力いただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

3 委員紹介

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 続きまして、本日が第 1 回の研究会でございますので、研究会の委員のご紹介をさせていただきますと存じます。

私のほうから五十音順で名前をお呼びいたしますので、恐縮ですが、一言ご挨拶をいただければと存じます。

それでは、岩手大学人文社会科学部教授、竹村祥子委員でございます。

○竹村祥子委員 岩手大学人文社会科学部の竹村祥子です。どうぞよろしく願いいたします。

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 続きまして、株式会社イーアールアイ監査役、谷藤邦基委員でございます。

○谷藤邦基委員 株式会社イーアールアイの谷藤でございます。1 人だけ場違いな人間が紛れ込んでいるような感じになっておりますけれども、この 3 月まで地元の岩手経済研究所というところで研究しておりましたので、その関係もあって委員のお話をいただきました。よろしく願いいたします。

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** 続きまして、山田委員はおくれてご到着されるということで、岩手県立大学総合政策学部教授、吉野英岐委員でございます。

○**吉野英岐委員** 岩手県立大の吉野でございます。専門は社会学で、岩手に住んで19年目ですので、ちょっとぐらい岩手のことをわかってきたかなと思っております。よろしくお願いいたします。

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** 続きまして、特定非営利活動法人いわて地域づくり支援センター常務理事、若菜千穂委員でございます。

○**若菜千穂委員** 若菜です。ふだんは農山村のまちづくりをおじいちゃん、おばあちゃんたちと一緒にやっているということをしております。よろしくお願いいたします。

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** また、本研究会におきましては、アドバイザーといたしまして京都大学こころの未来研究センター教授の広井良典アドバイザーにもお越しいただいております。

○**広井良典アドバイザー** 広井でございます。3月までは千葉大学にいました。つい千葉大学のと言いかけてしまうのでございますが、このような本当に貴重な機会に参加させていただいて、大変光栄に思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** どうもありがとうございました。

4 協議事項

- (1) 座長の選出
- (2) 研究会の基本的な考え方について
- (3) スケジュール
- (4) 意見交換
- (5) その他

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** 続きまして、協議事項に早速入らせていただきたいと思います。

資料1、「岩手の幸福に関する指標」研究会設置要領をごらんください。1ページでございます。要領の第6条に基づきまして、研究会の議長は座長が務めることとされております。本日最初の研究会でございますので、座長が決まるまでの間、私、臼井が進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

協議事項の1、まず座長の選出に入らせていただきます。同じ要領の第5条に基づきまして、研究会には座長を置き、座長は研究会で選任するものとしておりますが、選任の方法につきまして、いかなる方法で行うかにつきまして特にご意見ございますでしょうか。

特にご意見がないということでございましたら、事務局からの指名推選の方法によることとしてよろしゅうございますでしょうか。

「異議なし」の声

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** ありがとうございます。

事務局といたしましては、公益財団法人東北活性化研究センターの幸福度定量化研究会のアドバイザーを務めるなど、幸福に関する指標の研究経験が豊かな吉野英岐委員に座長をお願いしたいと考えておりますが、いかがでしょうか。

「異議なし」の声

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** ありがとうございます。

それでは、座長には吉野英岐委員をお願いをしたいと存じます。

座長におかれましては、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、恐縮です。吉野座長におかれましては、座長席のほうにお移りいただきまして、以後の議事の進行をお願いできればと存じます。

○**吉野英岐座長** ただいま事務局からのご指名で座長になった吉野でございます。先輩方がいる中で、こんな役をやって大変申しわけないのですがけれども、皆様のご意見を整理して、たくさんのご意見をいただくような形で進めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速ということで、議事次第に従いまして本日の会を進めていきたいと思っております。

今は、協議事項（１）の座長の選出まで終わりましたので、この後（２）の研究会の基本的な考え方について、事務局のほうからご説明よろしくようお願い申し上げます。

○**臼井政策地域部政策推進室評価課長** それでは、事務局のほうから本研究会設置の考え方、指標に関する考え方につきましてご説明申し上げます。座ったままで失礼いたします。

それでは、３ページの資料２をごらんいただければと存じます。横の岩手の幸福に関する指標の導入についてというところでございます。ここで指標を導入する趣旨、また今後の進め方について、事務局のほうからご説明をさせていただきたいと思っております。

まず、①、「幸福に関する指標」導入の趣旨をごらんください。こちらに４点考え方を挙げております。（１）、物質的なゆたかさに加え、岩手ならではの生き方やゆたかさ注目すること、個人と集団全体の幸福との関係性といった視点を踏まえること、こういったことが重要であるというふうに考えている点が趣旨の１点目でございます。

また、２点目でございます。平成 30 年度までのアクションプランの期間内に指標を試行的に導入し、政策評価等への活用を行ってまいりたいというふうに考えてございます。

（３）、次期県民計画における本格導入を目指し、県民や有識者の皆様のご意見を踏まえた検討を行いたいと考えております。

（４）、指標設定につきましては、岩手に根差した風土や文化、暮らし、また復興の大

きな力となっている地域や人のつながりといった岩手ならではのゆたかさに着目すること、こういった観点から今回幸福に関する指標の導入を考えてまいりたいというふうに考えているところでございます。

続きまして、②、「幸福に関する指標」導入の進め方をごらんください。まず、ステップ1からステップ4、平成27年度から平成31年度以降と、ステップを4つに分けてお示しをしております。ステップ1といたしまして、これは昨年度に当たりますけれども、昨年度行いました県民意識調査におきまして、県民の幸福に関する意識等を調査いたしました。結果については、また後ほど事務局のほうからご説明申し上げます。

続きまして、ステップ2でございます。平成28年度、今年度から来年度にかけまして、そういった県民意識調査における事前調査結果などを踏まえながら、本研究会でご議論をいただきたいと考えております。

また、ステップ3でございます。来年度以降、ステップ3として次期県民計画、平成31年度以降の次期県民計画と連動いたしまして、セミナーやワークショップ等を開催いたしまして、県民との意見交換を行いたいというふうに考えてございます。

そして、平成31年度以降、ステップ4といたしまして、次期県民計画での指標の本格導入を目指してまいりたいと考えております。こういった中で、政策評価の実施とあわせて幸福に関する指標を切り口とした支援ツールとして、その指標を活用してまいりたいというふうに考えているところでございます。

指標の導入に関する趣旨、また今後の進め方については以上でございまして、続いて1枚おめくりいただきまして、資料3、5ページをごらんいただければと存じます。これまで考え方の背景と進め方についてご説明をさせていただきましたが、続いて指標策定に向けた県としての基本的な考え方についてご説明をさせていただければと存じます。

1番の背景・目的については、先ほどご説明した内容と重複するものでございますので、割愛をさせていただきます。

2、指標の設定方針をごらんいただければと思います。今後県として幸福に関する指標を設定するに当たります、基本方針をお示ししているところでございます。まず、(1)、新たな施策の展開に活用できる指標とするということでございます。今回の指標を設定するに当たりますは、単にその平均値とか、そういったものを追いかけて、その数字がひとり歩きをしてしましまして、短期的な上下とか、他地域との比較のみに使われるようなものになってはいけないのではないかと考えております。中長期的な時系列や属性間での分析により個々の指標が示す意味も踏まえながら、新たな施策の展開に活用できる指標としたいというふうに考えているところでございます。

(2)、経済的・物質的なゆたかさに加え、岩手が目指すゆたかさに着目した指標とするということでございます。岩手県の施策の推進に当たります、やはり価値観や地域の固有性が多様化していく中で、また人口減少社会にも直面していく中で、これまで追及されてきたGDPの拡大、成長ということ自体も相対化して考えていく必要があるものと考えております。そのため、指標の設定に当たりますは、物質的なゆたかさに加えまして、地域が持つ個性、特性を踏まえながら、岩手が目指すゆたかさに着目いたしまして、その施策の展開に生かすとともに、ひいては県民の皆様が岩手県における幸福について考えていくきっかけとしてまいりたいというふうに思っております。

(3)、県民から広く意見を求めるとともに、専門家の意見を踏まえ、設定するというところでございます。行政が幸福について今後指標化を検討するに当たりましては、それが画一的なものになってしまったり、また県民の皆様への押しつけになってしまうことは避けなければならないというふうに考えているところでございます。そのため、平成31年度以降、次期県民計画も意識しながら、県民や専門家の皆様のご意見をいただきながら検討を進めてまいりたいというふうに考えているところでございます。

以上、3点が設定方針の基本的な考え方でございます。

続いて、3、検討を要する事項をごらんいただければと思います。今後指標を検討していくに当たりまして、想定される論点を整理しているところでございます。簡単に申し上げます。まず、(1)、幸福の概念というところでございますが、これにつきましては先行事例等をもとに、一定の共通認識を持っていく必要があるのではないかとこのところでございます。

また、(2)でございます。指標の設定に当たりまして、幸福に関連する領域がどのようなものかについて、ここにも少し例を挙げておりますが、仕事、収入、健康、家族、こういったもののこういった領域が幸福に関する指標として考えられるかということでございます。その際に、それぞれの個人は集団に属しておりますので、単にみずからの幸福を単純に追及するだけではなくて、やはり一定のルールや環境の中で、互いの幸福を担保しているという面もあろうかと存じます。そういう意味では、個人と集団の幸福といった視点も踏まえる必要があるのではないかとこのところでございます。

(3)でございます。指標の種類でございますが、指標の種類といたしまして、後ほど先行事例ご説明いたしますけれども、主観的指標であったり、客観的指標であったり、またそのバランスであったり、そういったことについて検討する必要があるものと考えております。

(4)、指標の表現方法でございます。これにつきましても指標の捉え方として、個々の指標の集まりと捉えるのか、それとも1つの指標に統合していくのか、こういったところが先行事例等を見ましても論点になり得るのではないかとこのところでございます。

(5)、岩手が目指すゆたかさを示す指標でございます。岩手が目指すべきゆたかさとしてどのような領域が考えられるのか、特に岩手というところに着目したときにどういう指標が考えられるのかということについては、大きな論点だと考えてございます。

最後、(6)でございます。指標の活用方法ということでございまして、政策評価への活用のあり方であったり、また県民参画による指標の活用方策であったり、こういったことについて考えていく必要があるものと考えております。

事務局でこれをお示ししているところでございますので、過不足あろうかと存じますが、こういったところが論点として考えられるところでございます。

具体的な幸福に関する指標につきましては、次期県民計画を見据えて、また県民のご意見などを踏まえながら、県として策定していくべきものと考えておりますが、本研究会におきましては、それに当たっての基本的な考え方をお示しいただければというふうに考えているところでございます。

事務局からのご説明は以上でございます。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。

後ほど意見交換のところで委員の皆様のご意見をいただきたいと思いますので、引き続きまして次の（３）、スケジュールについてもあわせてご説明、よろしく願い申し上げます。

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 続きまして、恐縮でございます。資料４をごらんいただければと思います。今後の想定するスケジュールについてお示しをしております。資料４をごらんいただければと思います。

想定スケジュールということで、県民意識調査や研究会、報告書、また次期県民計画に向けた総合計画審議会、こういったことについて大まかなスケジュールを整理してございますが、真ん中あたり、研究会のところをごらんいただければと思います。本日第１回研究会を開催いたしまして、少し目を右のほうに移していただきまして、第２回から第４回と、これは想定として書かせていただいておりますが、大体３回程度開催させていただいて、１０月ごろに中間報告をいただきたいと考えております。

そして、次期総合計画に向けて、一番下のところでございますが、総合計画審議会でのご報告であったり、また来年度に向けた県民意識調査の準備といったものを進めてまいりたいというふうに考えております。

目を真ん中のほうにお戻しいただきまして、第２回以降の協議イメージについて、事務局の案をお示ししております。このあたりにつきましては、議事運営の中でというふうにも考えてございますけれども、私も事務局といたしまして、今日県民意識調査の速報についてご報告申し上げますけれども、それをさらに詳細に分析したものについて第２回では事務局のほうからご報告させていただきまして、幸福に関する指標の領域であったり、また岩手の幸福をあらわす指標についてご議論いただきたいと考えております。そういった議論も踏まえながら、第３回から第４回にかけて中間報告に向けたご議論であったり、あとは今後中間報告から、また最終報告に行くに当たりまして、さらに調査すべき事項などについてご議論いただければというふうに考えてございます。

なお、最終報告の時期につきましては、中間報告の内容も踏まえつつ、またご相談、ご議論いただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

スケジュールに関するご説明は以上でございます。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。

それでは、ここまで、以上（１）から（４）までの説明ありましたので、この後は広井先生に今日お越しいただいておりますので、広井先生から、用意された資料に基づきましてお話を伺って、そしてそのほかの資料についてもその後お話を伺った後に、意見交換という流れで行きたいと思いますので、よろしく願いいたします。

では、広井先生、よろしいですか。

○広井良典アドバイザー どうも、ご紹介いただきました広井でございます。まず、先ほど申しましたように、このような非常に貴重な機会でお話しさせていただけること、本当に幸いに思っております。あと私自身も決してこの幸福というテーマを専門的にずっと

やっていたというわけではございませんので、また今日ご専門の先生方がいらっしゃる前ではありますが、最近幸福に関するいろんな政策やらテーマに多少かかわることがございましたので、そういった経験も踏まえまして、多少の話題提供ということで、一応 30 分以内ということで伺っておりますので、少し話題提供をさせていただければと思っております。

資料、これからパワーポイントでお話しさせていただければと思いますけれども、資料 7 ですね、お手元には配られているかと思えます。

私のほうからは、大体最初に幸福度指標の背景、それから幸福度指標の展開と論点、それから先ほどちょっとお話の中にもございましたけれども、人口減少社会とか地方創生ということが今盛んに議論されている中で、そういった状況とどうつながってくるのか、多少のまとめというようなことでお話をさせていただければと思います。

まず、幸福度指標の背景ということでありまして、最初ちょっと身近なところからお話しさせていただければと思いますけれども、先生方はよくご案内のことかと思えますが、幸福度の指標のランキングみたいなのがよく出て、最近活発に出されているわけで、ささっと行きますと、左側は世界価値観調査、ミシガン大学を中心に行われているもので、これは 1 位がデンマークで、日本が 43 位とか、真ん中のはイギリスのレスター大学の *World map of happiness*、世界幸福地図という、これもデンマークが 1 位で、日本はかなり順位を落として 90 位です。それから、一番右のは、この 2 月か 3 月に公表された、国連が数年前から世界幸福レポート、*World happiness Report* というのをを出していますけれども、ここでも 1 位がデンマークで、日本はかなり順位を下げて 53 位というようなことで、決してこれは額面どおり受け取れるような話ではなくて、幸福というのは、この後も議論になるように極めて繊細なといいますか、微妙な概念で、文化差というようなことも大きいものですから、決してこれで日本は順位が低いのかということ額面どおり受け取るものではないかとは思いますが、大きく言うと経済的な豊かさの割に、若干この幸福度という点において見劣りするというのは、ちょっと一つ出発点として考えておくべき点かと思えます。

これを含めて、これも先生方もご案内のことが多いかと思えますけれども、こういった議論が今研究面でも政策面でも非常に活発になっているわけでありまして、有名なところではノーベル経済学賞を受賞したようなスティグリッツやセンといった経済学者がフランスの当時のサルコジ大統領の委託を受けて、GDP では十分生活の豊かさははかれないということで、特に生活の質や持続可能性というようなことを重視した GDP にかわる指標が求められているというような報告を出したりとか、それからブータンの *Gross National happiness*、ちょっと後でも少し触れますが、非常にもう有名といいますか、一定の影響を持っておりますし、私自身がここ数年かかわらせていただいておりますのは、東京都の荒川区が GAH というのをやっています、余りまだ知られていないかと思えますけれども、これは GAH というのはグロス・アラカワ・ハピネスということで、荒川区の地域の幸福を考えていく指標ということで、ちなみに GAH を荒川区が唱えたのが 2005 年で、2009 年に荒川区自治総合研究所というのをつくって、かなり丹念な指標づくりをやってきたり、あるいは単に指標づくりというのではなくて、最初に荒川区が取り上げたのが子供の貧困、それから地域力とか、個別のテーマも取り上げな

がいろいろな施策を進めたりしているというようなことがあります。

それから関連で、内閣府に幸福度に関する研究会というのが 2011 年に設けられまして、私も専門ではないのですが、社会科学の立場から参加させていただく機会があったのですが、そのときは大きくは経済社会状況、心身の健康、それから関係性、つながりというのが入っているのが一つ興味深い点かと思えますけれども、そういったことで幸福を考えていくと、こういったいろんな動きが今進んでいるかと思えます。

背景にある関心といたしましては、先ほどのご説明にもございましたように、これはちょっと見にくい図で恐縮ですけれども、幸福の経済学とか幸福の政治経済学と呼ばれるような領域があって、横軸が 1 人当たり GDP で、縦軸が、ここでは生活満足度、ほぼ幸福度ということで、要するにこれは経済発展の初期段階では、GDP がふえるとある程度生活満足度も上がっていくけれども、経済がある段階に達するとかなり関係がランダムになってきて、GDP がふえれば幸福になるというようなものではない、もっと多様な要因がかかわってくるという、そういう問題意識が基本にあるかと思えます。

では、どういった要因が重要かということで、これも非常に単純化してお示ししているものですが、どういった要因がある程度経済が発展した社会で重要かとなりますと、やはりコミュニティーとか、人との関係性とか、それから格差や平等、分配の問題とか、それから私なんかは一つ非常に重要な要素かと思っておりますけれども、自然環境とのつながりとか、それから広い意味での精神的、宗教的なよりどころとか、これはまたいろいろな議論があり得るかと思えますけれども、こういったあたりをどういうふうに考えていくか。

ちょっと幾つか今日の配付資料にも、ほかのもかなり丹念に示されているかと思えますけれども、比較的注目すべき例としましては、先進国の集まりである OECD が数年前からこの幸福度指標のプロジェクトというのを進めておりますけれども、大きくは (1) のほうで、やはり個人の幸福、Individual Well-being、それは主観的幸福度もありますけれども、大きく生活の質、これは健康、ワークライフバランス、教育と技能、社会的つながり、市民的参加とガバナンス等々というようなこととか、それから物質的条件ということで、所得と富み、仕事と稼ぎ、住宅とか、そういったものが見られると。

ただ、OECD のほうで、まだこれからの課題というような形で残されている課題として、もう一つ、(2) の持続可能性という、ここにある意味で個人を超えたレベルということにかかわってくるのだと思えますけれども、自然資本、人的資本、経済的資本、社会関係資本の長い時間軸での幸福とのかかわり、こういったことがまだいろんな形で議論されているところだと思えます。

ブータンの GNH も、時々主観的幸福だけを見るのかというふうに誤解されることもありますけれども、そういうわけではなくて、まずこういう 4 つぐらいの領域を立てて、その上でさらにその領域を 9 つぐらいに設定して、さらにそれぞれの領域ごとに 8 つの個別指標である程度細かく見ていくような、主観的なものと客観的なものを組み合わせてというような内容になっているかと思えますけれども、やはりブータンの場合は仏教ということが背景として無視できないものとしてあると思えますし、問題意識として近代的な価値を相対化するとか、文化的、精神的価値を重視するというような理念といえますか、思想

が背景にあるかと思います。

ちょっとここで、基本論になりますけれども、先ほどの資料でも検討を要する事項に幸福の概念というのがありましたけれども、これは非常に雑な単純化した整理ですけれども、幸福というときに、大きく言うと2つの考え方の系列があるのではないかと。左がひとまずリベラリズム的な幸福観というふうにしていまして、これは非常に近代的な考え方で、何よりやはり個人の自由ということの基本に据えて、効用の極大化、今言いましたように近代的なもので、それとセットとして個人が自由な経済活動を行って、全体として社会が拡大、成長していくと。ハピネスというのは、よく語源的にh a p p e nとかh a p p e n i n gなどと共通しているとか言われることありますけれども、どちらかという短期の視点が中心であるのです。

それに対して、右側のとりあえずコミュニタリアリズム的な幸福感としていましてけれども、むしろコミュニティーということを出発点に置いて、利他性や協調性というようなことを割と重視して、伝統的な価値とか、あるいは文化、それから世代間の継承性というような、こういったものを割と重視して、どちらかという先ほどの拡大、成長志向に対しては定常志向とか、先ほどの持続可能性みたいなことに割と力点を置くと。ハピネスに対して、むしろこれはc o n t e n t m e n tとかc o n t e n t e d n e s s、老荘思想に由来する足を知るとか、知足、充足、平安とか、こういった幸福感に割と親和的な幸福概念。これはちょっとやや単純化したものですがけれども、少しこういう基本的な考え方も整理が必要などころだというふうに思っております。

以上、ちょっと基本論ですけれども、では具体的に幸福度指標というのをどういう形で考えていけばいいかということで、展開と論点というふうにさせていただいております。これは、私自身が荒川区の幸福度のほうに多少、ささやかながらかかわってきたところから、こういうところかなというようなことを、ちょっとまだ試行錯誤的に考えてのお話になるのですけれども、幸福度指標の意味として、3つぐらいかなと。

最初は理念的な意味で、やはりこれは先ほどのお話、ご趣旨の説明ともつながりますけれども、自分たちの地域をどのような地域にしていくか、それを考えて、しかも幸福というそれ自体非常にポジティブなプラスの価値、こういうことを考えていくということ自体に一つ意味があるのかなと。

あと、よく地域づくりなんかの話で、ない物ねだりではなくてある物探しが大事だという議論があるかと思いますが、そういうプラスの価値を発見したりつくっていくという、幸福について考えるというのはそれが一つ重要なポイントになるかと思います。

片や2番目は、指標としての意味ということで、こういった調査を積み重ねることで、むしろ課題を発見して、どこが不足しているか、何が求められているかを見つけていくという、あるいはその政策のプライオリティーを考えていくという、そういう意味があるかと思います。

それから、(3)は、こういった指標づくりに市民といいますか、住民が参加していく中で、その参加の過程自体に意味があるとか、そういうこともあろうかと思いますが。

とはいえといいますか、実際ちょっと私自身も荒川区の事例に関わったのですが、これはいろんな議論があり得るところで、それをちょっと幾つか重要と思われるところを簡単にお話しさせていただきますと、幸福度をつくるということに対して、ある意味では必ず

出てくるといいますか、疑問が、幸福というのは非常に個人的、あるいはプライベートな、主観的なものであって、それを行政が幸福度とかいって関与するというのは、ちょっとそれは問題ではないかと、ちょっと視点を変えますと、幸福を増やすというのはどちらかというと民間企業とか、私の領域に委ねればよいのでは、ディズニーランドが幸福をふやしているかどうか、ちょっと人によって見方が違うかもしれませんが、そういった議論ですね。さらには、行政が積極的に対応するべきは、いわばむしろ不幸を減らすことであって、こちらのほうがある程度定型的ないし客観的に言えるのではないかと、少し理念的な話に触れさせていただきますと、アメリカの政治哲学者のロールズの正義論とか、それから最小不幸社会というような考え方も、そういった考え方に割とつながるものであるかと思えます。

ここで示されている論点をちょっと2つぐらい拾い出してみたいと思うのですが、今出ておりますが、幸福と不幸という話で、これが言えることは、幸福度指標というのは、ただ幸福とは何かを定めて幸福を増やすというようなことだけを考えているわけではなくて、そういう意味では不幸を減らすということも当然含まれるわけで、例えば荒川区が呼びかけて全国の基礎自治体が今八十幾つ参加している幸せリーグというのがありますが、そのメンバーの一つである石川県の加賀市というのは、幸せの指標の意義を不幸をなくすと捉えて、子供の貧困問題を重点的にやって政策を展開すると。

それから、幸福、不幸とか、満足、不満足というのは、見方を変えますと市民あるいは施策の利用者の視点を取り入れるということで、単に行政がこういうことをやりました、やりましたというのではなくて、その成果というか、受け手の視点、利用者の側の視点を入れるということでも意味があるのではないかと思えます。

これもよく日本で聞かれるマズローの欲求段階の話と幸福の話は、やはり接点がある話であるかと思えますけれども、皆様よくご存じの下位のものから、生理的なものから、愛情と帰属の欲求、尊厳欲求、自己実現欲求というものになりますけれども、幸福の議論というのは恐らくこの全体に包括的にかかわってくるものになるのではないかというふうに思っております。

それから、さっきの続きで、行政の役割ということですが、公と私の役割分担ということですが、私自身がやはりここで重要かと思えますのは、共のコミュニティーの領域ということになるかと思えます。ちょっと理屈っぽい言い方をすると、近代的な原則というのが私的自治の原則と呼ばれる公と私をはっきりと分けて、私の領域には行政は原則として、例外的な場合を除いて関与しない、最小限の関与しかしないというようなものが基本となったわけですが、現代の社会では公と私に対して、第三のといえますか、共の領域が、コミュニティーというものが非常に重要なものとして浮かび上がっており、かつ公と共と私というのがクロスオーバーしているという状況があるかと思えます。

ですから、この幸福度の指標なりを考えるということは、コミュニティー政策ということと非常に結びつくもので、実際荒川区も、さっきちらっと触れましたけれども、地域力ということをかなり重要な柱として展開しているということがあるわけです。

これちょっと荒川区の例ですが、荒川区は比較的高齢化対応というようなことで、割と高く評価されている自治体ですが、地域力ということを重視して、ここは東京の下町みたいなところで、町会活動というのが結構活発で、そういったものを重視して、

高齢者の見守りネットワークとか、これは例えば新聞販売店との連携というのは、新聞が三、四日ずっとたまったままになっていたら、何かちょっと問題が発生しているのではないかというようなことで、それと行政が連携するとか、緊急通報システムとか、孤独死がほぼゼロというようなことが言われていて、コミュニティー政策とか地域力ということと結びつけて幸福度を考えていると。

ですから、ちょっと図式的に整理すると、この左から右の時間軸の流れで、一旦共同体が全て公と私に分かれていたのが、もう一度、先ほど来お話ししているクロスしていくような、こういう理念と幸福度の話が徐々につながってくるのではないかというふうに思います。

さらに、幸福度指標を策定することの実質的な意義は何かと。例えば指標を策定したからといって、それによって住民の幸福度が上がるというわけでもなくて、強く言えば行政の自己満足にすぎないのではないかというような議論もあつたりします。それについては、先ほどちらっと言いましたように、関連の調査をしっかりと行うことで課題の発見とか、政策の優先順位を見定める、これにつながるといことが一つ重要かと思ひます。

荒川区の場合で言ひますと、幸せにとって重要だと思ひものとか、それから各種のアンケート調査を行つて、どのような領域と幸福実感との結びつきが強いかなというようにことを調べたり、逆にといひますか、満足度が低い領域をむしろ重点的に探していつて、どういつた施策が今不足しているのかといひのを探したり、そういう政策とのリンクといひことが重要になつてくるかと思ひます。

あと、先ほどからお話ししているようなことと重複しませんが、施策ベースではなくて成果ベースにするとか、縦割りになりがちな政策を総合化するとか、プロセスに参加することに意義があるとか、そういったものがあるかと思ひます。

だんだんまともに入つていきたいと思ひますけれども、ちょっと視点を変えて、幸せはローカルからといひことで、人口減少社会、地方創生と幸福度指標といひことを簡単に考へてみたいと思ひのですけれども、今お示ししている図は、もうこれは皆様おなじみのといひますか、増田レポート、あれはおとしですか、出て、人口減少が非常に活発に論じられているわけですが、これは長期に見たもので、江戸時代が大体 3,000 万人くらいであったのが、黒船ショックといひますか、欧米諸国の軍事力や、その背景にある科学技術力に度肝を抜かれて、線が直立するくらい人口がふえてきたと。それが、2005 年に初めて減つた年がありまして、その後ちょっと上下しておりましたけれども、2011 年以降は一貫した減少期に入つて、先日の国勢調査でも 2015 年のは、初めて 2010 年、前回から減つたといひことで、今の出生率が続けば、こういった形で 2050 年 1 億人を切るとかいうふうになっているわけで、これはまるでジェットコースターのような図になっているわけで、大変だといひことになるわけですが、ちょっと私の主観的な持論ですが、確かにいろんな大変な課題があることは間違ひないのですが、少し視点を変えると、むしろチャンスといひますか、新しい出発といひような、そういうプラスの意味もあるのではないかと。この線が直立するほど人口がふえている時期といひのは、それによつて物質的な豊かさとかをかなり充足してきた面あつたわけですが、この坂道が示しているように、相当無理をしてきて、いまだに過労死といひようなことが言われたりとか、そういうのがあつたと。失つてきたものも多々あつたはずで、そういったものをもう一度再

評価して、本当の意味の、さっき幸福度、国際的に見て日本がやや低いという話がありまして、本当の意味の豊かさといいますか、そういうのを考えていく、そういう出発点の時期とも言えるのではないかというふうに思ったりするわけです。

それで、これは少し話が世俗的あれで、何で「木綿のハンカチーフ」というのをお示したかといいますと、趣旨としまして、これは今日の委員の方で若手の方といいますか、これは世代によって反応が大分違って、学生に話しても全然通じなくて、今で言うとAKBどころではない人気があるとかいうような説明をしないといけないのですけれども、なぜこの話を入れたかといいますと、これは私自身は中学生ぐらいだったのですけれども、1975年にはやった歌で、ちょうど急な坂道の時代、拡大がなお続いた、若干それに陰りが、疑問が出始めていた時期でもあったかと思えますけれども、なぜこの資料をここで今入れたかといいますと、この線が直立していた時期というのは、言いかえれば全てが東京に向かって流れていた時代であったとも言えるわけで、この歌も東へと向かう列車というのが出てきたり、大都市での生活が楽しいみたいなことで終わるわけですが、そういう時代を反映していたと。それから、先ほど来お話ししておりますように、全く逆の方向の時代になっていくわけですから、これまでの延長ではない形で物事を考えていく必要が、そういう時期になっているかと。

ちょっと個別に見ますと、それを割とよく感じる一つの例が、若い世代のローカル志向というふうには書いているもので、学生とかを見ていても、地元とか、地域とか、ローカルなものへの関心というのが非常に高まっていると思えますし、言いかえますと今お話し申し上げているような農村、地方都市から東京などの大都市という流れとは異なる流れ。

ちょっと理屈っぽい言い方をしますと、ここが幸福度指標とつながってくるころだと言えないのではないかと思いますけれども、時間軸の優位から空間軸の優位へということで、拡大成長の時代というのは、もう1つの方向に世の中が流れて、時間軸、東京は進んでいる、地方はおくれているとか、アメリカは進んでいる、アジアはおくれているとか、そういう一つの物差しで地域を測ると。それが人口減少時代、ポスト成長といいますか、そういう時代においては、むしろそういった時間軸は背景に退いて、空間軸、それぞれの地域の持つ固有の価値とか風土的、文化的多様性とでも言えるようなものに人々の関心が向かうような、そういう中で幸福度指標というのもローカルなといいますか、価値を再発見していく、そういう一つの手だてとしての意味合いがあるのではないかというふうに思っております。

こちら辺は、ちょっともうはしょらせていただければと思えますけれども、先ほど言いましたように、割と学生とかを見ていても、自分たちの地域を世界一住みやすいまちにしたいとか、そういったローカルなものへの関心が高まっているというのを身近な経験としても非常に感じるところでありますし、それからちょっとこれはもうさきさきと確認にとどめさせていただければと思えますけれども、いろんな資料を見ても地元志向というのはいろんな形で高まっているというのが各種の統計資料から見ても示されていると。移住者が増加しているとか、ただこれは潜在的なものとしてはあっても、放っておけば進むというものではないと思っております、政策的な支援ということが課題になっている、バックアップが非常に求められると、そういうものではないかというふうに思っております。首都圏の大学に入学する地方出身者の割合は低下とか、そういったのも示されております。

す。

それから、もう一点、今のお話の関連で、簡潔にご紹介させていただければと思いますのは、これは 2010 年に全国の自治体を対象に簡単なアンケート調査を行った地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査ということですが、何が政策課題として重要かということをお聞きすると、やはり少子化、高齢化の進行と、それから人口減少や若者の流出というようなものが上位を占めているわけでありまして、地域別に見るとかなり内容が、地域差が大きいということが、当然と言えば当然ですが、示されておりまして、これはちょっと図が見づらくて恐縮ですが、一番上のほうは小さな自治体で、下のほうは大都市圏で、一番下が総合計ですが、上のほうの小さな農村部といいますか、自治体ですと、この左のほうのブルーの人口減少や若者の流出のあたりが課題として大きいと。それから、真ん中の中堅、中規模の都市ですと、薄い水色になっている中心市街地の衰退とか、空洞化というようなことが課題として大きいと。それから、大きな規模の都市になってくると、紫といいますか、このところで、コミュニティーのつながりの希薄化や孤独というようなことになりまして、ソフト面といいますか、そういったものが大きいと。ですので、幸福度指標という場合も、この地域の特性とか、地域差というようなことも意識しながら考えていくということが課題になってくようかと思えます。

最後ですが、幸福について考える時代とはということで、ちょっとこれは物すごい大きな話で恐縮なのですが、なぜ今幸福というようなことがこういうふうな、冒頭からお話ししておりますように、国際的にも国内的にも話題になっているのかということについての一つの視点ということで、ごく簡潔に触れさせていただければと思います。

今申しましたように、非常に幸福に関するテーマが、関心が高まっているわけですが、人間の歴史を振り返ると、もう一つこの幸福ということへの関心が非常に高まった時代があったというふうに思われるわけですが、それはドイツの哲学者のヤスパーズが枢軸時代と、精神革命と呼ばれることもありますけれども、紀元前 5 世紀ぐらいの時期で、この時代に今に続く普遍的な思想といいますか、これが地球上の幾つかの地域で同時多発的に湧き起こったと。ギリシャ哲学とか、インドの仏教、中国の儒教や老荘思想、それからキリスト教の原形としてのユダヤ教ないし旧約思想というようなもの、これが大体ほぼ同じ時期に起こっているという一つ不思議な現象であるわけですが、例えばギリシャのアリストテレスなんかは政治の希求する目標というのは何かということで、それは善ということであって、善とは何かということ、それは幸福にほかならない。これはエウダイモニアという、ちょっと幸福指標のことでも時々聞かれる、ある意味ではアリストテレス独特の概念ですが、幸福にほかならないということで、それはよりよく生きるということであるということで、ここでも公共政策と幸福の関係が用いられているのは、非常に不思議と言えば不思議な、現在に通じるものがあるかというふうに思えます。

なぜそういうことが起こるのだろうかということをお考えしてみると、これはちょっと私の勝手な想像ですが、最近のいろんな研究から、当時というのは農業文明がある種限界に達して、森林が枯渇したり、土壌が浸食されたり、物質的にどんどん、どんどん拡大していくという方向がある種限界に達して、もうちょっと外にどんどん発展していくという、拡大していくというのではない価値とか、そういったものが求められ、そういう時

代ではないかと。物質的生産の量的拡大から文化的発展へという、ちょっとひとまずそういう言い方をしています。そこで、幸福ということが、問いが湧き起こっていったと。

今の時代というのは、そういう意味で考えますと、ここ数百年続いたような工業化の文明というのが、ちょっと大きな言い方をしますと、ある種いろんな限界にぶつかっている時代で、当時と非常によく似た時代状況で、先ほどのご説明にもありましたけれども、単なる物質的な量的拡大というのではない価値を考えると、そういう時代という点で共通しているのではないかと。そういう背景があるのではないかとということで、少しその関連のスライドも入れさせていただいております。

これが最後のスライドになりますけれども、そういうことで今拡大、成長から、ある種成熟とか、私も割とよく使う言葉では、定常期というようなことになって、新しい価値をいろいろと考えていくと。

それから、先ほどローカルということもお話ししましたように、言うならばこれまでが地域から離陸していく時代にあったとすれば、これから地域への着陸の時代ということで、地域ごとの風土的、文化的な特性や多様性というものに目を向けると。そういった意味で、ローカルなレベルで幸福度指標をつくっていくということは、今申しましたような時代の流れを象徴するものと言えるのではないかとというふうに思っております。

非常に雑駁なお話となりましたけれども、ひとまず終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

○吉野英岐座長 先生、ありがとうございました。

時間的制約の中で、大変コンパクトにまとめていただき、ありがとうございました。幸福をめぐるさまざまな考え方、それから政策との絡み、あるいはもうちょっと深いところで、そもそも幸福ということをどのように考えるものなのか、あるいは現代社会はどのような特徴を持っているのかというようなことについても端的お話をいただき、ありがとうございました。

今日はこういった情報をいただきながら、後でまた議論をするということで、もう一つ、委員のほうから情報提供というか、話題がございます。

ちょっと最初いなかったのですが、山田委員がお見えになっております。まず、自己紹介をお願いします。

○山田佳奈委員 どの程度。

○吉野英岐座長 短く。

○山田佳奈委員 岩手県立大学の山田と申します。本日、大変申しわけありません、広井先生には、大変失礼をいたしました。必修の授業がございまして、ちょっと休むわけにいかずというところで、先生方、皆様には大変失礼いたしました。

それでは、座ってよろしいですか。

○吉野英岐座長 どうぞ。やりますか、早速。では、一旦ご紹介しますので。

山田委員は、平成24年から25年にかけて岩手県の総合計画審議会「ゆたかさ」検討部会というのがございますが、その部会長ということで、「ゆたかさ」検討部会の取りまとめをされていた方でございます。今日はその資料も用意させていただいておりますので、資料に基づいて「ゆたかさ」検討部会で検討されたことについてご紹介をよろしく願います。

○山田佳奈委員 それでは、改めまして山田でございます。本日簡潔にといいますか、前回の「ゆたかさ」検討部会というところで議論いたしましたことについてご紹介という宿題をいただきました。

実は、こちらにいらっしゃる谷藤委員さんも部会にお入りいただいていたので、お感じになったことですか、お話しいただければありがたいかなと、補足していただければありがたいかなと思っております。

まず、「人口」、「ゆたかさ」検討部会という2つの部会が書いてあるのですが、ごく簡単に申し上げますと、どうしてこういうのがあったかということで申し上げますと、24年度にアクションプランの中に掲げられております6つの政策推進目標といった中に、人口と県民所得という、この2つの政策目標というものがございました。それをさらにどのように推進していくかといったことを検討してほしいといいますが、していきましようということで、2つの「人口」検討部会と「ゆたかさ」検討部会というところに分かれて、実質的には1年半でしょうか、検討を進めたという次第でございます。

それで、もういきなり結論のほうに、まずはちょっと行ってしまいますけれども、ご準備いただきました資料8のほうをごらんください。A3の大きなものですがけれども、こちらが最終提言の概要ということでおまとめいただいているものです。こちらごらんいただきますと、一番左側の主な社会経済状況の動向、こちらを前提として、こうした人口減少がこれからある種やむを得ずやってくるという中で、どのように豊かな岩手の社会をつくり上げていくのがいいのだろうかといったところで、進めておりました。

真ん中の次の矢印のところ、一回2つの部会に分かれて検討を重ねてまいりました。ミッションとして申し上げますと、下のほうに「ゆたかさ」というところで、県民所得水準の国との乖離というものの縮小をどのように進めていくかといったことが1点、もう一点は、一方で経済的指標だけではやはり「ゆたかさ」というのはあらかたあらかたではないかといったことで、この2つの方向が検討のミッションでございました。ですので、1つは経済的なある種の格差といいますか、そういったところをどう縮めていくか、これはやはり一つ変えられない検討課題といったところになったことには違いございません。

ただ、やはり岩手ならではの豊かさというのをどう考えていくかということで、検討部会におきましてもなるべくいろいろな見方で、多様な視点を出していただきたいということで、委員の皆様から本当にさまざまなご意見を頂戴してまいりました。その具体のところというのが、1枚めくっていただきまして、A4のほう、こちらが最終提言の中のものから抜粋していただきました。具体的な中身としては、52ページ、「ゆたかさ」検討部会の意見ということで、こちらは本当にいろんなところを取りまとめたいただいたという形ですがけれども、まさに地域経済、やはりどうやって、例えばいろんな地域資源を使いながらしなやかな強い地域経済をつくっていくかといったところですか、細かいと

ころは、済みません、飛ばさせていただきますけれども、あとは働き方についても、もちろんさまざまな意見をいただいております。これは 54 ページに挙がっています。

55 ページに行きまして、やはり経済的なことというのももちろんですが、どのようにして健康であったり、広井先生のご専門でいらっしゃると思っておりますけれども、福祉といったところももちろん含めて、あとは子育てをどのようにしてみんなで参画して支援をしていくかといったところ。

また、57 ページに行ってくださいまして、「ゆたかさ」といったところをどういった観点で見られたのかと。例えば森林資源ですとか、伝統文化といったところのゆたかさといった、まずいっぱい出していただくというところで、次の社会に向かってといいますか、今後の社会、岩手という地域をどういうふうに見ていくかといったところで、ご議論いただいたというのが具体のところでございます。

結論として、済みません、A3 のほうに戻っていただきまして、最終的な流れなのですが、先ほど申しましたように「人口」と「ゆたかさ」と2つに分かれての議論を進めてきたところなのでございますけれども、やはり非常に重なるところが多うございました。最終的な中身というところ。ということで、もともとは個別の提言という形が想定されていたのですが、やはりこれらを統合して本審議会の政策提言ということで、資料8、A3 の右側でございます3ポイントに絞られたといいますか、ここに収れんをしていったという形でございます。

簡単に、1番、2番、3番で申し上げます。地域に根差した資源を生かして魅力あふれる岩手をつくる、どんどんその地域を好きになっていくという点です。2番目としては、やはりここは経済システム、どうやって確実なといいますか、所得などを得ていくかといった点。また、3番目としては、本当に生活のさまざまな側面、やはり安心して住んでいけるといったところの、こうした3点に最終的に収れんして政策提言ということでお示したというのが最終的なところになります。

三、四年前ということで、ちょっと細かいところが抜けているところもあるかと思っておりますので、もし谷藤委員さん、補足いただけるところありましたら、お願いいたします。

以上です。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。

後ほどまた意見交換のときにご意見をいただきたいと思いますのですが、一応この資料8の1ページ目の右側の3点に集約させて、具体的なものについてさまざまお書きになっていると。既に地方創生の言葉も入っているような感じもあって、早目に岩手県では議論されていたのだなということよくわかりました。ありがとうございます。

では、もう一つ、もう一点、県のほうからの資料がございまして、幸福に関する指標の検討に当たりまして、先進事例既にごございますので、それを事務局のほうからご説明していただきたいと思います。

それから、岩手県におきまして、平成28年県の施策に関する県民意識調査、先ほど言及ありました。その中でも幸福に関する調査もされているということで、そこについてもあわせてご説明をお願いします。

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 それでは、事務局からご説明させていただきます。

まず、資料5にお戻りいただきまして、先行事例についてご説明をさせていただきます。その後、今座長からもございましたように、県民意識調査の速報についてご説明をさせていただきます。15分程度お時間を頂戴できればと思っております。

それでは、まず9ページ、資料5をごらんいただければと思います。ここでは、事務局のほうで、先ほど広井アドバイザーからの話にもございましたけれども、幾つか事例をご紹介します。OECD、内閣府、また吉野座長がアドバイザーを務めておられる東北活性化研究センター、あと福井県が幹事のふるさと知事ネットワーク、富山県、京都府、三重県、熊本県、新潟市、また広井アドバイザーにかかわられた荒川区、そして県内、滝沢市ということで、9ページから19ページまで整理をさせていただきます。専門家の皆様の前でご説明するのは大変恐縮でございますが、ご案内のこともあろうかと存じますが、どうぞよろしくお願いいたします。

また、私どものほうで把握できる範囲で整理をしたものでございますので、不完全な部分がございましたらご容赦いただければと思います。

それでは、時間の関係もございまして、それぞれ9ページから簡単にご説明をさせていただきます。まず、多くの事例で幸福に関する研究、導入をするに当たりまして、共通していることとしては、やはり政策評価等の次の施策に生かす指標とすること、また市民参加、県民が参画といった幸福について考えるきっかけとしているということが挙げられるのではないかと思います。

9ページのOECDの事例でございます。まず、表のつくりでございますが、一番上に概念的な図をお示ししております、その下に目的、検討手法、領域、種類、表現方法、行政評価への活用、その他特徴ということで整理をさせていただきます。OECDの研究でございます。目的のところをごらんいただきますと、まず目的は幸福度等のそういったすぐれた測定方法があれば、それをもとに各種政策への立案ができること、また社会がこういった種類の進歩を求めていくかということについて市民参加の議論を進めること、こういったことを目的として挙げております。

指標の領域、2つ下でございますが、指標の領域はごらんとおりでございまして、指標の種類としては客観的指標が中心でございますが、それを主観的指標で補足をするという形をとっているものでございます。

表現方法としては、1つに指標を統合するといったことはせずに、個々の指標の集まりで構成するダッシュボード方式と呼んでおりますけれども、そういった形をとっております。

一番下、その他特徴のところですが、一番上のポツにございますように、特徴として物質的な生活環境、生活の質、持続可能性、こういったところを3本の柱としているところがございます。

続いて、次の10ページをごらんいただければと思います。内閣府の研究事例でございます。こちら、広井アドバイザーのほうも委員としてご参画されたものでございます。内閣府の幸福度指標試案ということでございます。目的としては、幸福の原因、要因を明確

にすること、また2つ目として、社会全体として幸せについての考えを深めるきっかけとするというところがございます。

関連領域、種類、表現方法につきましては、それぞれごらんのとおりでございますが、特徴といたしましては先ほど広井アドバイザーのほうからもございましたけれども、柱として経済社会状況、健康に加えて、関係性といったところを柱としていること。また、主観的指標と客観的指標を併用されておりますけれども、そういった形で主観的幸福感というものを一番上に据えた上で、それぞれのものをバランスよく配置しているということが挙げられようかと思っております。

続いて、11 ページ、東北活性化研究センター、こちらは吉野座長がアドバイザーとしてかかわられたものでございます。この幸福度指標に関する研究でございますが、目的といたしましては、東北というところに目を向けていただいております。東北の暮らしのゆたかさを再定義するとともに、幸福度を客観的に評価できる指標により、多様な価値に基づく持続可能な暮らしと社会を実現する指針とするというところがございます。

関連領域、種類、手法はごらんのとおりで、種類としては主観的指標、客観的指標を併用されていて、表現方法もダッシュボード的にそれぞれでございます。

特徴といたしましては、上位概念として、包括項目として主観的幸福度を設定していること、また重視する点、2つ目のポツにございますけれども、例えば個人よりも地域としての幸福度を高めていくことに重きを置くこと、こういったことが特徴として挙げられようかと存じます。

続きまして、12 ページ以降でございますが、これは県として導入の事例をまとめたものでございます。12 ページはちょっとネットワークということもございまして、時間の関係で飛ばさせていただきます。13 ページ、富山県の事例をごらんいただければと思います。

富山のほうでは、内閣府の研究なども踏まえて、県民の幸福度を高めるための環境整備を図るためということで、150 主観的指標と客観的指標を設定されているということでございます。その結果を参考として、富山県の表現の手法で申しますと、行政の進むべき方向を見きわめるための道しるべという位置づけをされているということでございます。

一番下の特徴のところをごらんいただければと思いますけれども、あくまで県民の幸福度が今どういう状態にあるかというのを測るための尺度としてお使いになっているようで、総合計画のいわゆる施策領域とか、そういったところと指標の領域というのは一致させているというような使い方はしていないようでございます。

続きまして、1枚おめくりいただいた14 ページをごらんいただければと思います。京都府の取り組みでございます。京都府、目的のところでございますが、これも総合計画、明日の京都を踏まえて、京都指標という形で位置づけております。府民のしあわせの実感という本質的な目標に向けて、政府運営の方向性がかけ離れたものになっていないかを検討するために、京都指標というものを導入しております。こちらの政策評価は、また別に行われているようで、政策評価のデータも別途あるのですが、それとは別の指標として京都指標、統計データと、これちょっと抜粋でございますけれども、一番上をごらんいただきますと、上は統計データで、下は主観的にアンケート、府民意識調査で聞かれているものという、双方で構成をされているようでございます。これは、総合計画の実施状

況を示すレポートにおいて、京都指標の推移という形で府民の皆様にお示しをしているというところがございます。

その他特徴の3つ目のポツにもございますけれども、総合計画とその指標の領域というものは一致させているということがございます。

また、4つ目のポツにございますが、例えば着物を着用している人の割合といった京都ならではの指標なども含まれているということもございます。

続いて、15 ページ、三重県の取り組みをごらんいただければと思います。総合計画、みえ県民ビジョンというものがございまして、私どもで言うアクションプランの取り組みの成果、行動計画というものがございまして、その取り組みの成果を県民に届けるために、県民指標という達成度合いに加えて、幸福実感指標という16項目の指標を設定しているということがございます。その推移を把握することで、行動計画の進行管理を行っているというものでございます。

指標は、16項目全て主観的指標になってございます。これらにつきましては、総合計画の政策分野ごとに定めている、その他特徴の一番上のポツにもございますけれども、それぞれ政策分野ごとに定めているということもございます。また県民意識調査分析ワーキングといった組織を設置されて、詳細な分析レポート、これも含めてつくられているということございました。

続いて、16 ページ、熊本県でございます。熊本県、今地震で大変な状況でございますけれども、熊本県、先ほど広井アドバイザーのほうからも熊本のAKHについてのご紹介ございましたが、県民総幸福量という形でされております。こちらでは、目的はやはり総合計画の実施であったり、あとは地域の幸福要因の見える化、こういったことを行うということでございます。総合計画の評価レポートのようなものにその結果をお示しされているということございました。

種類のところをごらんいただきまして、主観的指標のみで構成をされているようでございます。大きく特徴的な点といたしましては、表現方法のところでございます。統合方式というものをとられていまして、この一番上の図をごらんいただきますと、4つの分類、夢を持っている、誇りがある、経済的な安定がある、将来に不安がない、この4点をそれぞれまた12の項目に分けて、それぞれの満足度と重要度で、満足度がどうであるかということと、あとそれぞれに関する重要度、ウエートをアンケート調査されて、統合指標をつくられている、AKHという形で指標化されているということが大きな特徴であるかと思っております。

これにつきましては、戦略、総合計画的なものの戦略というものとは施策の領域自体は一致させていないということで、独立してつくられているようでございました。

続きまして、市区の取り組みをご紹介します。17 ページ、新潟市でございますが、これは客観的指標のみで構成されているということもございますが、ちょっとご説明割愛させていただきまして、18 ページの荒川区の取り組みをごらんいただければと思います。

こちらは、広井アドバイザーもかかわられているということで、ご説明するのも恐縮でございますが、幸福度に関して先進的に取り組まれているのではないかと思っております。目的といたしましては2つ、指標化の側面と運動の側面ということで、施策を次につなげ

ていくという指標化という側面と、あとは区民の皆様が幸福について考える、地域について考えるきっかけとするということで、運動の側面ということで位置づけられております。それぞれの側面の中で、行政評価システムにも取り込んでおられるということでございます。

特徴としては、上位に主観指標としての幸福実感指標というのを置かれて、その下位という言い方が正しいのか、それに関連して客観指標も含めて関連指標を置かれているということでございます。区の総合計画と指標の領域を評価にも使うということで、一致をされているということで、確認したところでは指標の統合は行っていないというふうに考えております。

最後、19 ページでございます。県内の滝沢市の取り組みのご紹介でございます。滝沢市は、住民自治日本一ということを目指して、総合計画において幾つかそれをあらわす指標として示しております。上の図をごらんいただきますと、主要な統計データと、あと暮らしやすさ一覧表、幸福実感一覧表というものをそれぞれ評価の構成要素、その状況はどうであるかというのを見る構成要素として、地域最適水準を見ていくというところで整理をされております。

これらを一体的に活用することで、施策の反映を図っているということで、特徴といたしましては幸福実感と暮らしやすさというものをそれぞれ分離されまして、幸福実感については世代別に指標といったものを設定しているということが挙げられるかと思えます。

以上、先行事例について、それぞれ大変簡単ではございますが、ご説明をさせていただきました。全体を見渡してみますと、その目的等に応じて指標の領域をどうするか、また主観指標、客観指標、その併用といったところの考え方、さらに併用する場合には上位とか下位とか、そういう関係性をどうするか、また本指標の策定に当たって同一指標、熊本のように同一指標を設定するか、それとも個々の指標の集まりとするか、また幸福に関する指標と総合計画の施策体系を一致させるか、さらには総合計画における指標として位置づけるのか、それとも独立した指標として、幸福度というものを総合計画からまた少し独立させた形で位置づけるかといった点で、それぞれ目的に応じて差異が出ているのかなというふうな印象でございました。

先行事例のご説明は以上でございまして、続いて資料6、21 ページの県民意識調査の結果についてのご説明でございます。こちらにつきましては、本日公表ということで、本日公表される資料でございますので、まさにできたてほやほやのものでございます。

先ほどの資料2というか、全体のステップ1からステップ4をご説明する中でも、昨年度そういった県民意識調査の中で幸福に関する質問をしたということをご報告申し上げましたが、そのご説明でございます。

まず、2の調査の概要をごらんいただければと思います。期間といたしましては、⑤の調査時期、平成28年1月から2月でございます。県内に居住する20歳以上の男女5,000人を対象として、郵送法によるアンケート調査を実施しております。有効回収率は3,576人ということで、71.5%でございます。属性については、下をごらんいただければと思います。

1枚おめくりいただきまして、22 ページ、23 ページをごらんいただければと思います。こちらは、例年の設問でもございますけれども、生活満足度と重要度に関する結果を載せ

ております。ここはちょっと簡単に申し上げますけれども、22 ページの生活全般としては、一番上の丸囲みのところがございますが、年々満足、満足とやや満足の割合は上昇傾向にございまして、また不満、不満、やや不満の割合は減少傾向にあるということが結果として見てとれるところがございます。

また、23 ページでございますが、重要度、満足度、あとはその差を見たニーズ度といったことについて、それぞれ掲載をしております。例えば重要度が高い項目では、適切な医療とか、高齢者、障害者に安心な地域づくりといったものが挙げられております。あと、満足度が高いのは、ごみとかりサイクル、こういうものが高い、一番下のニーズ度ということ、安定した就職環境、高齢者や障害者に安心な地域づくりということのニーズが高いということで、それぞれ高い、低いを整理してございますが、これについてはまたご参考でござらんいただければと思います。

24 ページをござらんいただければと思います。今回平成 28 年 1 月から 2 月にかけて行ったもので、問 3 というものをつけ加えております。幸福に関するご質問を県民の皆様にごささせていただきます。3-1 から 3-3 までございまして、3-1 はそれぞれの項目ごとに現在の実感についてお聞きしております。例えば 3-1 の下の表の項目のところをござんいただきますと、家族とよい関係がとれていると感じるかとか、お住まいの地域は安全だと感じるかとか、そういったそれぞれの項目について、感じるか感じないかということについてお答えをいただいております。

結果といたしましては、実感を持っている方の割合としては、家族とよい関係がとれていると感じの方が 62.5%、これは感じるやや感じるの合計でございます。お住まいの地域は安全だと感じるかということについて、6 割近くの方が感じるということでございます。続いて、仕事へのやりがいとか、住まいの快適さというところに続いております。

逆に、実感が高くないものとしては、子育てがしやすいと感じるか、必要な収入や所得が得られていると感じるか、こういったものが実感としては高くないものでございました。

続きまして、25 ページをござらんいただければと思います。3-2 では、これは直接的にあなたはどの程度幸福だと感じるかというのを 5 段階で聞いております。幸福、やや幸福、どちらともいえない、感じていない、余り感じていないということでお聞きをして、わからないという方もいらっしゃいますけれども、お聞きをしております。

結果といたしましては、51.3%の方が幸福とやや幸福で、幸福に感じておられるということでございました。一方で感じていない、余り感じていないの合計は、グラフでいうところの左から 3 番目、18.3%で、どちらともいえないという方が 24.3%いらっしゃるという結果でございました。

続きまして、問 3-3 をござらんいただければと思います。幸福と感じるかということに関連して、幸福かどうか判断する際に重視した事項は何かというのを複数回答可でご質問をしております。ここでござんいただきますと、上のほうからござんいただきますと、健康状況、家族関係、家計の状況というのが、60%以上の方がこれを重視されたというふうなことでございました。また、あと 4 割前後としては、居住環境とか余暇といったところが挙げられております。

必ずしも重視した項目ではないというところでは、その下のほうにも挙げられているものがございます。

あと、26 ページ、27 ページ、その次のページ以降につきましては、また問 1、問 2 と関連することがございますので、今回はご説明割愛させていただきますので、ご参考でござらんいただければと思います。

今回の特に問 3 の部分につきましては、また次回までにクロス分析等を行うことによって、より詳細な結果のご報告をしてまいりたいと考えておりますので、まずご議論の材料といたしまして、速報版ということでご説明した点ご理解いただければと思います。

事務局からのご説明は以上でございます。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。これまでなされてきた幸福に関する研究、指標についてのお話と、一番ホットな、まさについこの間行われた調査の結果もあわせて紹介しました。残された時間、約 30 分ちょっとでございますので、今日は委員の皆様の自由な発言というか、これまでの資料を踏まえてというか、そして岩手県でこれから幸福について考えていく際にどういったもの、あるいはゆたかさも含めてですけれども、どういった考え方があり得るのかとか、あるいは指標についてもどういったものが、あるいは領域が重要であるのかなどについて、今日は皆様からのご意見をいただきまして、それを一つ素材にしていきながら進めていきたいと思っております。

順番はどうでもいいと思っておりますが、一応決めなければいけないので、名簿順で行きたいと思っておりますので、竹村委員、谷藤委員、山田委員、若菜委員、広井先生は、また最後にアドバイスをお願いしたいと思っております。

それでは、竹村委員からよろしくお願ひいたします。全体を見て、幸福についてどういった点がキーポイントになるであろうか、あるいは岩手の幸福を考える場合には、どういったところを考えておいたほうがいいのかと思うとか、その辺フリーでお願いします。5 分ぐらいずつですね。それでは、マイクをお願いします。

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 すみません、それぞれにマイク 1 本ずつでございますので、大変恐縮ですが、回しながらお使ひいただければと存じます。よろしくお願ひいたします。

○竹村祥子委員 今日は、先に資料をいただいていたのですけれども、盛りだくさんだったものですから、もうお伺いしてから考えるほうがいだろうというふうに考えておりました、先生のお話や推進室の課長さんのお話等、部長さんのお話等をお伺いしたところです。

それで、1 つはこの研究会で何をどこまで研究するかということについて、結果はともかくとしても、早目にお知らせいただきたいという点が 1 つあって、今日お話を聞いたところでは、資料 5 のところのご説明から、多分行政評価への活用をどう考えるかということ、それも単純なレベルではなくて、かなり踏み込んだレベルでこう使うとか、それからこういうことについては聞くけれども、もう少し別の機会に利用するとかいうような、はっきりした何かをちょっと考えなければいけないのかというふうにお伺いしてござ

た。

この件に関しては、ちょっと勉強不足なので、どういうレベルの利用の仕方があるか、評価の仕方があるかというだけではなくて、行政の中でどう使われるかということについては、ちょっと私はもう勉強不足だけではなくて、素人なので、その件をわかるように、済みませんが、お知らせいただけるといいかなというふうに思っております。まず、これが1点。

それから、どういうことに関して幸福度を測るかということに関して、岩手県は大変広いので、地域のまとまりをコミュニティー、県全体ということも重要なのですけれども、地域の単位をどの範囲で見るか。お示しいただいているのは、振興圏という形でお示しいただいているのですが、振興圏では少し広過ぎないかというのが私の感想です。このところは、どの範囲がいいかということはよくわからないのですけれども、だからといって市町村レベルでやるというのも、ちょっと形式的過ぎてしまって、難しいだろうというふうに思っております。ここら辺については、何かデザインの案みたいなものも出てくるといいのかなというふうに思っています。

それと同時に、今度は県を横断して行って、県全体でというふうに考えたときには、どちらのところであったか、今ちょっと示せなくなってしまったのですけれども、世代間の特徴とか、それから仕事の職による特徴とか、盛岡なんかは雇用者多いわけで、雇用者としての生活の満足ということと、農業だけではなくて、例えば漁業の満足というのは、やはりどうも違うのではないかとこのごろ思っているのです。それで、震災を経験してみたときに、何か雇用者の満足みたいなものの指標で、家族なんかを見ていると、その指標を持ち込んで三陸のほうの方たちの話を聞くと、ちょっと違うのではないかという実感が出てきたわけです。ですから、そういう形での、今度は振興圏というだけではなくて、生活の特徴ということ別に何か考えてみると。これは、それこそ行政の指標にはならないのかもしれないかもしれませんが、幸福度を測るということに関して言うと、必要なのではないかという感じがします。

それと同じ視点ではないのですけれども、年齢層の若い人たちには若い人たちというか、世代によって、やっぱり求めるものが違うということがあると思うのです。ですから、そういう指標も一緒に出していただきたい。全国との比較ということも一つの視点としては必要なので、例えばジェンダー指標のようなものというのは、今世界的なところからも求められているわけですから、これはこれとしてきっちりジェンダー指標のようなものはそろえると、指標としてそろえるというようなことも目配りしていただきたい。

何かちょっとあれもこれも欲しいという感じになってしまいました。済みません、これくらいにしておきます。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。

続いて、谷藤委員、お願いいたします。

○谷藤邦基委員 何からお話しすればいいのか、非常に私自身まだまとまっていないのですが、1つ、先ほど山田先生のほうからお話あった県の総合計画審議会の部会で検討したことについてちょっとお話しさせていただきたいのですが、正直3年ぐらい前からやって

いたやつなので、かなり忘れていたものも多いのですが、資料8のA3のもですが、ここに大体まとめてはありますが、いろんなバックグラウンドを持った方々が集まって議論して、しかも「人口」検討部会と「ゆたかさ」検討部会を最終的に統合して提言するということがあったので、これを見ても書かれるべきことが全部書かれてしまっている感じで、どこがポイントかというのは、多分人によって受けとめ方相当違うと思います。

ちなみに、私自身が一番強調したかったのは、左のところかというと、主な社会経済状況の動向の中の4番のところですよ。ICTの進展というようなことがありますけれども、その下の特に2番目のポチ、この人工知能技術のコウの字が間違っているというあたりは、ちょっとご愛きょうなのですが、ここが非常に私はこれからポイントになるのではないかと、ということを当時申し上げていた記憶があります。

ここがどうしてポイントになるかというと、人の仕事なくなるという話につながってくるわけですよ。この辺、実はついせんだって、3月15日に広井先生がまさにNHKの「クローズアップ現代」に出演されてこの問題を語っていらしたのですが、そういうことについて私どもは大分前からかなり懸念を持っていたと。その懸念の背景にあったのは、岩手県の人口が減っている問題とこの問題はかなり絡んでくる点なのです。岩手県の人口の推移を見ていくと、やはり仕事の量というか、雇用の量というか、そういったものにかかなり密接に関連した動きになっていて、いつかはいわゆる企業誘致ということでかなり工場も進出して、雇用の場が生まれて、人口もふえるところまではいかないまでも横ばいを保っていた時期があると。それが21世紀に入ってから急減し始めるというのが、これは実は当時は中国との競争で雇用の場がどんどんなくなっていたという状況があるわけですよ。日本からどんどん工場が中国に進出していったと。その分、国内あるいは岩手県内の工場が廃止あるいは規模が縮小されていったという流れがあったと。そういう状況の中で、何とか対応しつつ、盛り返してきたなと思ったあたりで状況が変わってきたのが、どうも2010年過ぎたあたりからで、それまでは中国との競争、あるいはさらにベトナムとかバングラデシュとの競争だったわけですが、その状況が変わってきて、どうも機械との競争が始まっているぞというのが見えてきたのがその辺からですよ。

端的に言うと、岩手県の製造業も出荷額がどんどんふえているのに、従業員はどんどん減っているわけですよ。だから、産業振興と雇用の問題は、どうもつながらなくなっているのではないかとというのが一つの問題意識としてあって、その背景にあるのがこの4番の問題という意識があったわけですよ。

結局、ある時期に経済的な豊かさ、日本では既に達成されたみたいな議論もされた時期があるわけですが、少なくとも私どもの認識としては、最低限の収入が得られるような仕事がないと、ゆたかさの議論もできないのではないですかというのが私自身の認識としてあるわけですよ。だから、ここの問題は非常に注目して見ていると。

実際日本で有名なのは、国立情報学研究所の新井紀子先生であるとか、海外であればMITの研究者が結構そういった本、「機械との競争」であるとか、「ザ・セカンド・マシン・エイジ」とか、そういったものを書いているわけですが、ああいった本のおりになるかどうかは別にしても、でも実際問題相当程度雇用は減ってきている中で、ではどうやって仕事をつくっていくのというあたりが私の一番の基本のところにあったのです。

その問題は、結局収入の問題につながってくるし、さらには貧困とか格差の問題にも広がっていく可能性がある問題で、そういう目で先ほどご説明あった資料6の県民意識調査結果を見ていますと、問3-1のところで、この問3-1は、確認ですけれども、項目ごとに感じるか感じないか聞いているのですよね。

○臼井政策地域部政策推進室評価課長　そうです。

○谷藤邦基委員　そうした意味でいくと、12番の必要な収入や所得が得られていると感じますかという項目が、一番感じている人が少ない項目になっているわけです。右に行くと、問3-3で、重視する項目としては3番目になっていますけれども、家計の状況というのがトップスリーの中に入っていると。トップスリーでありますし、6割を超える3つの主要な項目に入ってきているということは、やはりこの辺がゆたかさをいろいろ議論する中でも避けては通れないところなのだろうなと思っています。

これから状況がどんどんもっと悪くなっていく可能性を私自身は感じておるものでして、例えば今子供を東京の大学に出すということを考えたとき、非常にお金がかかるので、東京に行くのはいいけれども、せめて国公立にしてくれとか、私立は諦めろみたいな話が、我が家でも似たような話が出たりするわけです。その辺が、やっぱりいろんなゆたかさを考えていく上でも前提としては必要なことかなと思っています。

あと、個別の指標の問題に関しては、これからいろいろさらに議論されていくのだろうとは思いますが、客観的な指標を統合しないでただ並べると、それは実はただのデータブックでしかなくて、見てもよくわからないと。人によって見たいことが違ってきて、議論がなかなか、それを前提にしてはできなくなってしまうのかなという感じはちょっと持っています。

ただ一方で、統合してしまうとよくわからなくなってしまうという面も、これは気をつけなければいけないと。さらには、いろいろな資料を拝見していくと、ある項目について満足と不満足の割合を出して、引き算するようなことをやっているところもあるようですけれども、それでいい指標もあるかもしれませんが、でもそれやったらまずいというのも多分ある。端的に言うと、例えばあなたは幸福ですか、はい、いいえ、それを引き算したら何がわかるのというような項目は絶対あるはずで。要するに、幸福ですが50%、不幸ですが50%、引き算したらゼロ、あるいは幸福とも思っていない、不幸とも思っていないという人が100%、同じ結果になってしまうというのは、多分これは何もわからないことになってしまう。さらに、それは政策判断、あるいは価値判断につながると思うのですけれども、引き算やってもいいという発想になったら、それは多分幸福だと感じている人が不幸だと思っている人より1人でも多ければいいという発想につながっていくのです。でも一方では、不幸だと思っている人をできるだけ減らすのがいいことだという価値判断も多分出てくるので、そこをどういう指標をつくるかというのは、どういう考え方、価値判断に立つかということにかかわってくるので、実はかなり難しい話だなと思っています。

そういう意味では、実は主観的指標のみで構成しているというところには、若干興味を引かれてはいます。その辺は、ちょっとこれからまた議論が必要なところかなと思っています。

るところです。

あと、先ほど竹村先生からもご指摘があったのですけれども、岩手県を1つのくくりで見ているというのは当然出てくることです。また、よく岩手県は実はいいところなのだよねと、それを客観的にあらわしたいねという話は、大分前からいろいろありまして、私が前にいた岩手経済研究所にもそういうお話が、おたくでやってくれないかという話が、よく来ました。来たけれども、基本的には即答でお断りはしないのですけれども、大体お断りしていました。要するに、自分たちがいいところだということを自分たちが数字つくって出したって、それはなかなか説得性がないと。しかも、そもそも実際に数字をはじいても、なかなかいい県だと出せないのですよ。客観的な指標というか、そういうものでやろうとすると。相対的に、要するに横で比べると、岩手県はいいところだというふうにはなかなか出せない。だけれども、いいところだと感じている人は多いと。このギャップどうしましょうとなると、やっぱり主観的指標というのはそれなりに意味があるのかなというところは感じております。

いろんなことを申し上げましたけれども、そういった意味では、資料3にあったかと思うのですけれども、時系列的な評価をしていくというのは、それは結構いいやり方かもしれないですね。横と比べるよりは、同じ地域、竹村先生のご指摘のとおり岩手県でくくるかどうかの問題はありますが、同じ地域の中で時系列的に見ていくというのは、一ついき方としてはありかなと思っています。

といったところで、何かまとまりませんが、今日はこれぐらいのところで。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。いろんなヒントをいただきました。

山田委員、お願いします。

○山田佳奈委員 私は、先ほど簡単にご紹介させていただきましたとおり、「ゆたかさ」検討部会というところで部会長というのを仰せつかったのですが、これを伺ったときに、何と荷が重いといえますか、重い課題をいただいたなといったのが率直なところでした。

先ほど申し上げましたように、部会のミッションとしましては、委員の皆様と事務局の皆様のご多大なご尽力によりお示ししたということになるのですけれども、私自身としては、やっぱり4年前から何らかゆたかさの指標というのを、岩手ならではのゆたかさの指標というのを何かつくれないかなというのがあったものですから、ある意味4年越しの宿題といったところというのを感じております。所信表明のような形で恐縮ですが。ただ、一方で、例えば部会やっている中で、県外、県内の視察ですとか、いろんなことをさせていただいたりする中で、果たしてどこまでこうしたゆたかさというのをご提示するかという、一方で困難さといえますか、ということも非常に感じたというのが実感です。

その意味でも、こうした今回幸福という、済みません、もし前半でご議論あったら大変恐縮ですけれども、そもそも幸福という言葉でいくか、ゆたかさという言葉でいくかですとか、そこからまず議論というのは、ひょっとしたら出てくるのかなといったところもございます。

先ほどゆたかさというところで、本当に簡単にご紹介いたしましたけれども、やっぱり

少しずつ言葉のニュアンスで受けとめる印象ですとかが変わっていくように、多分指標の中身も変わってくるかと思えますので、そこをどこら辺、これも本当に狙いというところにかかわってくるのだと思っています。ですので、幸福という、やはり主観的と感ずるかどうかというところがひょっとしたら強くなるのかなと思っています。

かなり感想めいたところでしたけれども、先ほどご説明いただきました、例えば主観と客観の指標ですとか、いろいろ拝見しながらなるほどなと思って、もし今想定するのであればというぐらいですけれども、やはり先ほどおっしゃられた主観と客観といったところを幾つかクロスしていくというのも一つあるのかなというのを考えております。また、先ほど竹村先生がおっしゃった、ある種ジェネラルに比較できるところというのを置きつつ、一方で実は広井先生の資料を事前に拝見していた中で、先ほどのご説明、多分お時間が足りなくていらしたので、省かれたのだと思いますけれども、後のほうで地域経済の話がされていて、そこでの持続可能性といったところと関わりまして、例えば、万が一電気がとまっても、まきで補うことができるか、そうした一定、ある種の持続的な、持続できる条件。そういったことというのは、ごめんなさい、まだ考えている途中というところではあるのですけれども、こうした岩手だからこそできる指標というのを、これまた別途つくるといった、何か良いところ取りのようで恐縮ですけれども、そうした二段構えというのもあり得るのかなといったところを考えております。

かつ、先ほど運動論的、これは広井先生にご紹介いただいたところもそうですし、ほかの県や市町村の事例もそうですけれども、実はゆたかさ部会をやっているときも、これを果たして県民の皆さんはどのようにごらんになるだろうかといったところがちょっと気になっていたところでありました。これを我々は仕事として、ある種ミッションとしてやるのだけれども、これを果たしてどう県民の皆さんに還元していくかと、そこがずっと実は気になっていたところでもあります。ですので、どのようなタイトルになるにせよ、県民の皆さんと一緒に考えていける、そして一緒に将来を考えていきませんかという、何かそういう巻き込みができないかなというような、ちょっと具体的にはまだ考えられませんが、そうしたことを同時に考えております。

ということで、よろしく申し上げます。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。

続いて、若菜委員、お願いします。

○若菜千穂委員 広井先生のお話を聞いて、ふだん使わない哲学的な脳みそをすごく使って、本当にいろんな刺激を受けて、とても楽しく聞くことができました。

2つ、3つほど意見を述べさせてもらいたいのですけれども、基本的にそういえばそうだなと、実はこの幸福に関して思ったことがあって、お話をずっと聞いていて、広井先生のお話を聞いていて、やっぱり私の幸せは他人にはかられたくないとか、人の幸せは、基本的には、原則的には、やっぱり測れるものではないというところに、でもこれを私は広く県民に運動としてやってもらいたいというのが前提にあるのですけれども、何かそこはあってもいいのかなというのが一つです。

ただ、その後社会的とか、政策的とか、もちろん道徳的とか、教育的にも、幸せについ

てやっぱり考える、もしくはそれをはかっていこうというアプローチは悪いことではないのだと、そこを言う前、言うためにも、やっぱり幸せは測れるものではないよねという、測ることに意味があるのだよというところのスタンスが前提としてないと、県民には受け入れられないなというのは、お話を聞いていて思いました。ただ、その価値はあるなということは、きちっと訴えていくということ。

もう一つ感じたことが、すごく私そうだと思うと訴えたいのが、人も社会も、個人ないしその家族ないし社会も幸福を求めていいのだというところが、私学生と一緒にワークショップとかやっていて、学生とつき合うことも多いのですけれども、震災後特に社会のためになることにすごく一生懸命なのですけれども、ではあなた自身の幸せちゃんと求めているのというところが、何か本当に欠けているなという気がして、もう一つは私交通もやるので、お年寄りの方とか、障害のある方の外出支援もやるのですけれども、大体そういう人に限って、今の状況に満足していますと、私は幸せですと、環境に合わせて自分で幸せつくっていますというふうな言い方する、それはそれでももちろん幸せなのだけれどもというところがあって、ただ幸せというのは求めていいのだというところの動きを私は今回入れたいなというふうに思っています。

1つ目の指摘なのですけれども、やっぱりその指標と一緒に運動論という言い方出ましたけれども、指標を仕掛けとして使っていくというところは入れていただきたいなと。ずっと出てきたのが、県の政策評価の指標としてというのはあると思うのですけれども、多分それだけだとこんな研究会開く意味余りなくて、私は農村の地域づくりもやっていますし、学生ともつき合って、例えば学生がサークルでちょっと幸せはかっているよとか、自分のいる仲間の幸せはかっているよとか、隣の大学のサークルとはかり合いっこして比べてみようとかという使い方ができる指標、ワークショップではかって、何か数字が出てしまうと。もしくは、地域に行ったときにちょっと指標を出してみよう、この地域出してみようとか、もちろんお話しあったようにおじいちゃん、おばあちゃんチームで出してみよう、若い人チームで出してみようという、そういうような少人数でも、もちろん県が支援、政策評価に使うのであれば、こういう大規模なアンケートで同じようにやっていいと思うのですけれども、それだけではない指標の出し方というのは、多分そういうのをつくれるのではないかなとっていて、そういう意味で運動論的な部分という、今も出ていたので、そちらのほうと一緒にしていったものを何かつくっていただければなど、この研究会で提案していけたらなというふうに希望をしています。

それから、やっぱり幸せとは何か、広井先生のお話聞いていて本当に思ったのですけれども、私は幸福論で、ゆたかさよりはちょっと幸福という指標で言ったほうがいいと思うのですけれども、幸せとは何かということもやっぱり考えざるを得ないわけで、それも考える、考えるということは、求めていいということをきちっと言うということだなとあって、そういう意味でみんなが幸せについて語り合える場というのも、こんなような指標のつくり方にしてもらいたいと思います。それが2点目なのですけれども。

そういう意味でちょっと思ったのは、幸せですかと聞かれて、今の学生とかはすごく困るのです。私たちと言えればあれなのですけれども、私たちぐらいの年代になると、これぐらいに答えておけばいいやみたいな、伸びしろ残しておけばいいやぐらいで、まあまあ幸せですみたいな、多分そこら辺につけることが多いと思うのですけれども、学生とかだ

と、本気で悩む。そういったときに、私多分こういう聞き方したらいいのではないかなと思うのが、幸せになろうとする努力をあなたはしていますかと。例えばそれが離婚という選択でも、それは自分が幸せになるためにというような、そういう幸せになる努力ができていること自体、本当に幸せだなという。経済的に果たせていないところであれば、幸せになる努力さえできないのだよということかなとは思いますが、そういう聞き方もしてもらえたほうが、両方ですよ、それだけではなくて、幸せですかというのと、幸せになる努力をしていますかと、私ちょっと専門的にはわからないですけども、そういう問い方もやれるような気がしたのでしたけれども、そういう幸せというのものもあるのかなというふうには、ちょっと思いました。

最後、4点目になってしまうかわからないですけども、済みません、最初から岩手らしさというのを出していききたいというキーワードがあって、岩手らしさとは大丈夫かなと思うんですけども、岩手の岩手らしい幸せが、例えば自然が豊かとか、人っころがいいとか、そういうところ、それは結局価値を押しつけているだけなので、そういう指標の選択肢の一つをこの研究会でつくるというのであれば、何か指標の出し方の方法に新しさがあれば、これを岩手オリジナルにできるのだという、私はそっちのほうのアプローチにしていきたいなというふうに思っております。

やっぱり住んでいる人も、今の学生も、1回出て戻ってくる、先生の後の方の説明にもありましたけれども、そういうのもありだし、本当に卒業してほんとみんないってしまうので、ちょっと岩手にはおさまらないし、価値観も岩手ではないかなと思うので、そういう指標に、選択肢の一つに岩手らしさを押し込めるのももったいないなと思っているので、何か新しい方法がここで生まれれば、全然よしとしていただきたいなと、お願いを含めて、ちょっといろいろでしたが、とても勉強になりました。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。

では、一応座長ではありますが、今日は個人的なというか、感想をまず述べて、その後、次回からは進行役をやっていきますけれども。

お話を聞いて、私もご紹介あったように東北活性化センターで指標づくりもしたのでありますが、やっぱり客観的指標と主観的指標をどういうふうに組み合わせていこうかというのは悩みました。結局幸福というのは、ある意味心理的な要素ではないのかと。つまり心理学の領域で研究できるものであるし、一方で経済学、つまり経済的な基盤が前提になっている話ではないのかということもよく議論があって、学問的にも多分経済学と心理学でこれ追求されてきたところですので、私は社会学の真ん中辺にいるという感じなのですけれども、やっぱりどういうふうにかかわれるのだろうかということも前のところでも考えました。

それで、これはちょっと受け売りであれなのですけれども、最近出た本で、「幸福の構造」という本が出ています。この本が手元にあるのですが、自著紹介の本があるのでありますが、島井哲志さんという、後でお渡ししますけれども、赤十字豊田看護大の先生が書いています。ポジティブ心理学という領域が今非常に注目されていると。幸せというふうにくくりにしないで、いわゆる人間の中での心のポジティブな働きというものがある、そこから人間の行動を理解できるのではないかというのが最近の研究、2000年代

だと思えます。

例えば日本語的に言えば、勇気とか、誠実さであるとか、感謝とか、希望もそうですね、それから好奇心とか、熱意とか、愛情、こういった言葉で表現されるような心の状態、こういったものをたくさん持ち合わせていると、何となく素人感覚で、ないよりはこういうのたくさんあったほうが、やっぱりその人は幸せなのではないかとかいうふうに、社会的にもそういうふうに見えます。そのきちんとした研究が先ほどご紹介した「幸福の構造」という本ですけれども、でもこの本を書いた人のお話がここに書いてあって読むと、実はそういったものというのは、余りこれまで心理学でも人間を理解するときに重視されなかったということを書いてあって、そうなのだと、逆に非常に大事な話なのではないのかなと思って読んでいたのですが、学問的には実はそこにアカデミックな世界で重視されてこなかったのを、だから 2000 年に入ってから新しい領域としてアメリカから出てきて、やっぱり人間、幸せというのは非常に統合的な指標、いろんなものが含み込まれた指標だと思うけれどもけれども、もう少し分解して考えると、ポジティブな心の動きというのを、実はどれだけ実現できるものかという。

おもしろい例が載っかっていまして、夜遅くまで残業している人は不幸なのだろうかという、県庁なんかはその一つかもしれませんが、夜遅くまで残業している人は、例えば仕事に追われて泣きながらやっているとか、もうとにかく残業代を稼がなければいけないというおうちの事情があるとか、とにかく仕事が遅くて、締め切りに間に合わないと、本当に大変追い詰められているというふうに見えるというふうにはよくある話だと思います。決して長時間労働を私は推奨しているわけではないのですが、しかし一方で非常に熱意、この仕事をとにかくやり遂げるのだというような心の持ち方、あるいはこれをやるのが自分にとって一番達成感が得られるのだというような、簡単に言えばやる気というか、そういったものも当然心の中にはあるのではないかと。決して長時間やれということではなくて、そういった気持ちを持って仕事をすることが、もしかすると充実感、さらには幸福感というものにもつながるのではないかと。同じ状態を見ているのだけれども、やっぱりもう少し内面的なところまで踏み込むと、やらされてやっている仕事も確かにあるかもしれないけれども、非常に情熱とか希望、好奇心を持ってやっている仕事もあると。例えば仕事だけではなくて、いろんな生活の領域でもそれはあるのではないかと。

こういったものは、なかなかはかり切れなかったのは、確かに今までの指標、客観的に労働時間とか、やはり客観的な収入というものではかれば、その動機はともかくとしても、労働時間は短いほうがいい、収入は多いほうがいいというような一つの指標が出てきますが、なかなかそれが人間の幸福感にまでうまく結びついているかということ、確かに違ふところもあるかなという意味では、最近の新しい研究も、これは広井先生が多分一番詳しいと思うのですけれども、そういったいわゆる客観的に測れるものと、現象は同じように見えるけれども、実は愛情や熱意や情熱というものが非常に生きて生きているというタイプは、どういうふうにかこれから見ていったらいいのだろうか。

特に岩手は希望郷いわてと、これも政策的な概念なので、アカデミック概念とはまた違うかもしれませんが、非常に希望という言葉が大事にされている県だと感じております。これなかなか捉えづらくて、希望学といっても、竹村先生もちょっとかじったのですけれども、希望学と言われても難しいよねということもあるのですが、しかし希望という考え

方も非常に今の時代これは重要で、どんな状況でも希望を失っていないことが、もしかしたら次のステップに踏み出せる重要なキーワードになっているのではないかと考えると、そこをどういうふうに今度、もう少しソフィスティケートというか、これをブラッシュアップして皆さんにわかりやすく伝えていくことが大事ではないかなと思って聞いておりました。

幸福というのは、あともう一つは、意外とちゃんと聞かないとわからないのですけれども、幸福ですかと言ったときは、かつての自分と今を比べているケースと、よそのところと、隣のおうちと自分でもいいです、というのがまぜこぜになっている感じがしまして、実はこれを研究ではよそと比べている、だから 47 都道府県がわっと縦列、あるいは国別に取り扱っているものというふうに使われているのですけれども、自治体の中で見ていくと、政策評価は実はこの3年間で効果あったかどうかという、3年前と今を比べることが多いのです。指標が上がったから、強化されたのだと。実は、そこが割と両方とも入ってしまっているのです、実は幸福というのは非常に相対的な概念であると。自分の中でも、時間軸の中で比べている、昔はよかったなとか。あるいは、よそよりもいいかなと。まざっているのをどういうふうに仕分けしていくかも、ある意味ではわかりやすく伝えることが大事かなと思って聞いておりましたので、まだまだ研究課題いっぱいあるのですけれども、非常に楽しみ、しかし大変難しいお題を今日はいただいたなと思って聞いておりました。

以上でございます。

広井先生、では最後をお願いします。

○広井良典アドバイザー それぞれの委員の先生方のご発言と、それから今の座長のお話、本当に印象深く伺いました。

特に最後、座長が言われて、私感銘を受けましたのは、実はポジティブ心理学のお話をされました。まさに幸福のテーマと直結するお話で、それを本当に一番核心の部分をご指摘いただいたなと思って伺っていたのですけれども、どういうことかといいますと、結局経済成長の時代というのは、つまり今いろんな分野でポジティブ何々というものが出てきていて、なぜそういうことがあえて言われるようになるのかなというのを考えてみますと、経済成長とかの時代というのは、放っておいても新しいものがどんどん出てきたりとか、いろんなプラスのものがある意味で出ていて、今のような経済が成熟して以降の時代というのは、なかなかそういう新しい物質的なプラスのものが出てくるわけでもないのです、ポジティブということを意識的につくっていくとか、考えていかないと、どんどん、どんどん、それこそネガティブになってしまうと。そういった意味で、幸福ということを、いろいろ課題はあるのだけれども、むしろ見つけていくといいますか、あるいはない物ねだりに対するある物探しということで見つけていく、そこに一つ非常に大きな意味があるのではないかと思います。

しかし、とはいえ、一方でネガティブといいますか、課題はまた一方で山積していますので、ちょっと幸福と不幸というような話をしましたけれども、結局幸福度指標を考えていく意味というのは、そういったプラスの価値を、独自の価値を考えていくということと同時に、課題を発見していくという、そういう側面もあるわけで、その両者をどういうふ

うにバランスをとって、両方考えていけるかという、その辺に一つ焦点があるのかなというふうに思いながら、皆様のお話を伺っておりました。

○吉野英岐座長 ありがとうございます。

まだ議論は尽きないところではございますが、一応予定された時間をちょっともう過ぎてしまいましたので、今日のところはいろいろ最初の情報提供いただいたものと、それから皆さんからこういった考え方が大事なのではないか、できるのではないかということ踏まえて、次回それを整理した上で進めていきたいと思っております。皆さん、ありがとうございました。

それでは、また事務局のほうに進行を戻します。お願いいたします。

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 貴重なご意見、どうもありがとうございました。

ちょっと済みません、お時間を超過しておりますので、簡潔に申し上げます。先ほど委員の皆様からご意見をさまざま頂戴いたしまして、私ども次回に向けてもいろいろ整理が必要だと考えてございます。特に竹村委員からもご指摘いただきました議論の範囲といったところとか、あとは政策評価と指標が今の岩手県でどういう形でやっているかといったこと、また地域や年代別の考え方については、県民意識調査をクロス分析することで一定ヒントが見えてくることもあろうかと思っておりますので、そのあたりについて、また事務局のほうで検討させていただきまして、次回資料として整理をさせていただきたいというふうに考えてございます。

次回でございませけれども、これから日程調整をまた改めてさせていただければと存じますが、大体6月から7月ごろを次回としては考えてございます。また、日程調整のご連絡させていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

5 閉 会

○臼井政策地域部政策推進室評価課長 それでは、事務局から申し上げることは以上でございませるので、よろしければ以上で本日の研究会を終了させていただきたいと思っております。

委員及びアドバイザー皆様におかれましては、大変長時間、お忙しい中ご出席いただきましてまことにありがとうございました。